

# 郡山城第16・17次 発掘調査報告書

社会保険大和郡山総合病院及医師看護婦  
宿舎建設工事に伴う事前調査

1989

大和郡山市教育委員会

## 序 文

大和郡山市の中心部は、江戸時代の城下町を中心として発展してきました。町中には今日もなお当時の面かげを伝える水路や町並などが残っており、近世の活気を偲ぶことができます。市内には、寺院、神社などの文化財がたくさん存在し、私達の生活に欠くことのできないものとなっています。当時の城下町での武士や庶民の生活については、古文書や絵図などからある程度のことは知ることができます。ですが、当時の物となると今日それほど伝世はしていないでよくわかりません。ところがここ数年来、城下町の発掘調査を進める中で、当時の瓦や茶椀などが見つかりつつあります。古文書などでしか知られなかった江戸時代の生活が、『もの』を通じて具体的に復元できるようになってきたのです。私は、ここに発掘調査の意義があると確信します。

21世紀を目前にした今日、早晚“近世の考古学”に曙光のさすことを念じ掲筆したいと思います。

平成元年3月31日

大和郡市教育委員会

教育長 井 上 三 夫

## 例 言

- 本書は、社会保険大和郡山市総合病院改築工事及職員・看護婦宿舎新築工事に伴う発掘調査の報告書である。
- 調査は、県保険課が大和郡山市に委託し、同市教育委員会（教育長 井上三夫）が受託して実施した。
- 調査地・調査面積等は下記の通りである。

次 数	調 査 地	調査面積	調 査 期 間	担 当
第 16 次	朝日町 1-62	約 180 m <sup>2</sup>	1988. 8. 4～8. 24	技師 山川 均
第 17 次	藤原町 4-18-20	約 300 m <sup>2</sup>	1988. 10. 3～10. 7	技師 服部伊久男

- 調査には下記の作業員・補助員が参加した。（敬称略・第16・17次併せて）  
(作業員) 中川 康・崎山庄勝・辻本義夫・岸田勝信・西川信義・増田高雄・堀川正治・  
杉山典三・米田利男  
(補助員) 萩田哲恵美・秋山幸枝・加藤洋子・岩城 守
- 本書の執筆は下記の通りであり、編集は服部が担当した。

I・II・N 服部 I 山川

## 本 文 目 次

I. 調査に至る契機と経過	1
II. 第 16 次調査	4
III. 第 17 次調査	8
N まとめ	10

## I 調査に至る契機と経過



図1 調査地点 (S=50,000)

大和郡山市朝日町に所在する社会保険大和郡山市総合病院は、昭和36年の開設後既に27年を経て、建物の老朽化が目立ってきた。長く県民の地域医療を担ってきた中核病院でもあり、さらに診療体制の拡充を図るために、全面的な建替えが計画されるに至った。当該地は、周知の遺跡である郡山城に含まれており、当然のことながら事前調査が必要とされた。このため、市当局と県保険課の間で再三にわたる事務レベルの協議を行い、その結果、昭和63年度において当市が事前調査を受託するに至ったわけである。病院の建替は数回の工期に分けて行われる予定であり、今回は第Ⅰ期工事予定地である敷地の南西部約2,000 m<sup>2</sup>を対象として行った。

また、同市藤原町においても職員・看護婦宿舎の建設が予定されていたため、この2つの開発に伴う事前調査を、各々郡山城第16次及び第17次調査とし、一体化して受託することになった。

いずれも、顯著な遺構は検出されず、試掘調査のみで終了しているが、こうした調査を契機として城下町の調査例が増加することが望まれるのであり、地味な調査ではあったが、以後の取りくみに資するところ大なりと考えておきたい。なお、病院の方は、来年度以降にも第Ⅱ期工事に伴う調査が行われる予定であることを付記しておく。また、郡山城下ではこれまで十数回にわたる調査が行われている。表1に示す通りであるので御参考されたい。

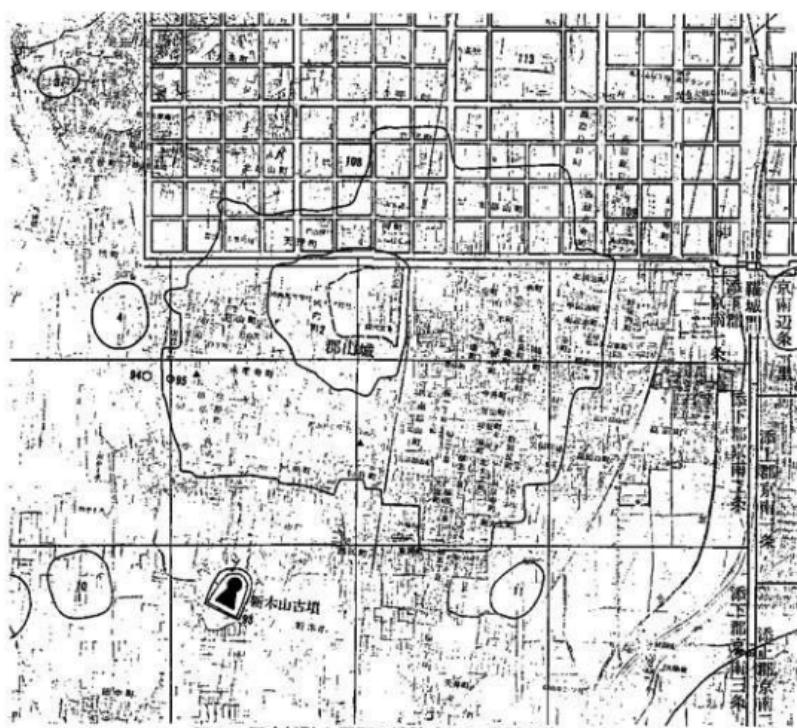


図2 郡山城跡と周辺の遺跡 (S=1:20,000)

次数	調査地	調査主体	面積	期間	概要
1	城内町 (緑曲輪)	奈良県立橿原考古学研究所	200 $m^2$	1979年 12月	建物、溝、水量調整施設
2	朝日町 (三ノ丸)	"	1,000 $m^2$	1982年 12月	試掘調査 マンション建設
3	城内町 (追手門)	"	700 $m^2$	1983年 1~3月	追手門の礎石、番所の礎石、 雨落溝
4	朝日町 (三ノ丸)	"	2,200 $m^2$	1983年 6~7月	第2次調査の本調査、櫓状建 物、櫓、土蔵、マンション建設
5	天理町	大和郡市教 育委員会	120 $m^2$	1983年 11月	中世の落込み 平城京右京九条三坊十二坪に 該当
6	城内町 (毘沙門曲輪)	"	13 $m^2$	1983年 12月	東西に走る構状遺構
7	城内町 (追手東隅櫓)	"	300 $m^2$	1985年 1~3月	隅櫓の礎石列、多聞櫓の礎石 列

表1



図3 既往の調査地点

調査番号	調査地名	実施機関	面積 (m <sup>2</sup> )	調査年月	調査内容
8	城内町 (追手向橋)	大和郡市教育委員会	100	1985年8月	試掘調査
9	朝日町 (三ノ丸)	奈良県立橿原考古学研究所	500	1985年月	奈良時代建物、土坑 マンション建設
10	北部山町	大和郡市教育委員会	120	1986年5月	近代の土坑、平城京右京九条 西坊五坪に該当
11	城内町	奈良県立橿原考古学研究所	400	1986年6・7月	石組の溝、建物跡 埋甕
12	城内町	大和郡市教育委員会	400	1986年6・7月	向橋の礎石列、埋甕
13	城内町	奈良県立橿原考古学研究所	250	1987年7月	近世土坑・溝等 県立郡山高校々舎増築
14	北部山町	大和郡市教育委員会	260	1987年11・12月	中堀跡、奈良時代の柱穴 都市計画街跡三ノ丸線
15	南大工町	"	100	1988年1月	外堀跡、ヘドロのみ 下水管敷設
16	朝日町	"	180	1988年8月	近世土坑他 奈本書
17	藤原町	"	300	1988年9月	奈本書

## II 第 16 次 調 査

第16次調査は、朝日町1番62号において実施した。調査前は駐車場として利用されていたところである(図4)。当該地区は郡山城三ノ丸の一面を占め、往時には「家老屋敷」が存在したと伝える。調査は昭和63年8月4日より8月24日まで、約2週間を費して実施した。

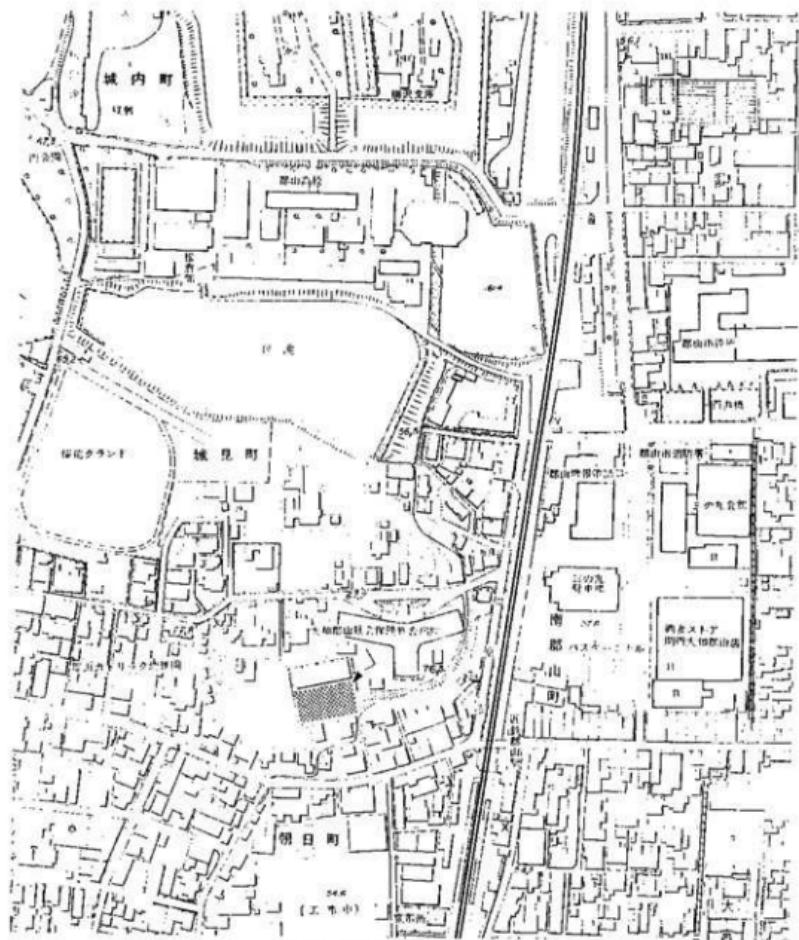


図4 第16次調査地点

調査対象地は、郡山城の天守台等がのる丘陵の南斜面上に立地しており、旧地形は北から南へゆるやかな傾斜をもっていたものと思われるが、現在はテラス状に整地されており、平坦地となっている。調査にあたっては、対象区にL字形にトレンチを配した(図5)。トレンチ面積は約180 m<sup>2</sup>である。重機(バックホー)によって整地土(病院建設時の盛土、厚約40cm)を除去すると、近世遺構面を検出することができた。

遺構としては、礎石など建物の基礎部分となるものは全て抜き取られており、その痕跡のみが残る。また抜き取り行為自体もかなり荒っぽく行われていたため遺構の損壊は著しい(図6)。これは、おそらく建物の基礎が重機(バックホー)によって除去されたためであり、バックホーのバケットの痕跡もところどころで明瞭に残っていた。そのため、「遺構」は幾何学的様相を呈し、建物の構造や規模を推定することは非常に難しい。また、同時にこのことは、建物の基礎部分が除去されたのは、比較的最近であることを示している。おそらく、病院庁舎建設時、あるいはその後に破壊されたものと思われる。したがって、今回の発掘調査は、残念ながらその実施する時機を逸したものといえるだろう。

既述のように、調査地は丘陵斜面を平坦に整地しているが、今回の調査区(トレンチ)内のみの所見では、大部分は切土による整地で、盛土は部分的である。また、この整地は郡山城築造に伴い為されたものであろう。建物の構造・規模等の把握は難しいが、その方向は地形に沿って決められ

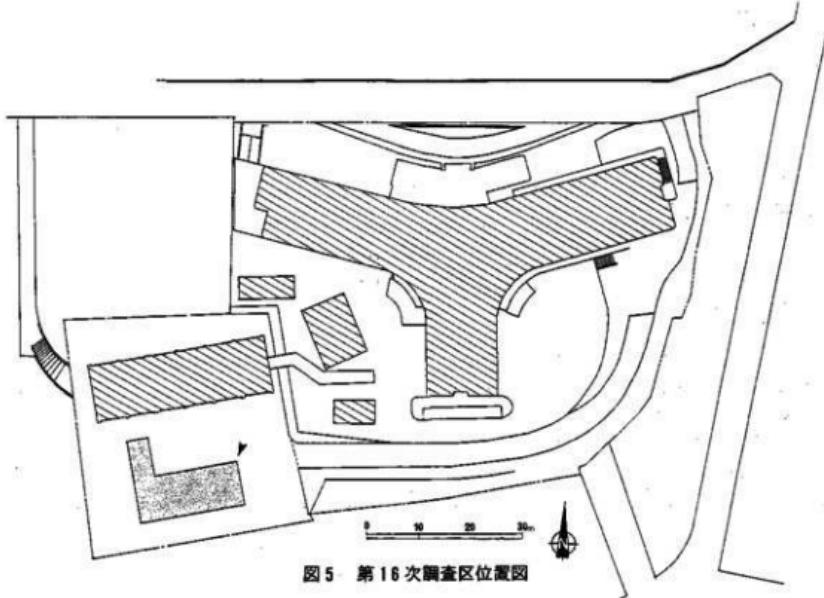


図5 第16次調査区位置図

たものと理解される。また、小便壺とみられる橈前系の甕(図6の矢印部分)のみは上半部を欠失するものの、原位置を保っていた。甕内部には尿素とみられる灰黄色の固着物がたくさん付着している(図版2-1)。

この他の遺物としては、近世～近代に至る日常什器類(図版2-2)、瓦、洗面台(瓦質)等がある。

今回の調査では、遺構面が最近になって重機によって攪乱されていたため、良好な成果を得ることはできなかった。近世期における建物を主とした遺構は、特に大和郡山市などの城下町においては、現在の町並みと重複するのが普通である。さらに、近世の遺構を覆う堆積土も、火山の噴火、あるいは大火事等の特殊な場合を除くと、ごく薄い整地土等の人為的堆積土に限られるため、地下遺構の保全に関しては、あまり良好な環境とはいえない。今回の場合のように、基礎が重機によって完全に抜き取られていたりすると、発掘調査はほとんど意味をもたないものとなってしまう。

木造建築物の場合はともかく、鉄筋コンクリート造りの建物(マンション等)の建設に際しては、地下遺構は今回の場合か、あるいはそれを上廻る規模で破壊されてしまうことは確実である。大和郡山市内においても、近年になってマンション建設が盛んだが、それは郡山城内においても例外で

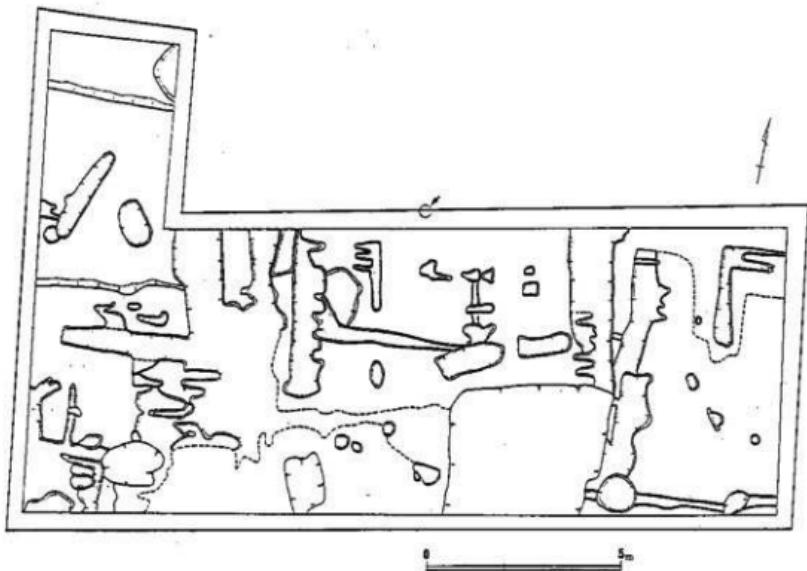


図6 第16次調査区平面図

はなく、むしろ大阪方面への通勤に好適の地という理由から、市内でも特にこうした積層式共同住宅の需要が高い地域となっている。したがってその建設も頻繁に行われているのが現状である。

こうした鉄筋コンクリート建物の建設に先立ち、充分な発掘調査を実施することは、城下町という貴重な文化遺産を後世に伝える責務を持つ我々に課せられた最底限の義務といえよう。

### III 第 17 次 調 査

藤原町4-18-20番において職員・看護婦宿舎の建設工事に伴う事前調査を実施し、郡山城第17次調査とした。該地は、城域の西端に近いところで、標高も約82mを測る西の京丘陵の末端部を占める場所である。以前は市営住宅が建っており、敷地全体に三段の平坦面が、各々2~3mの段差

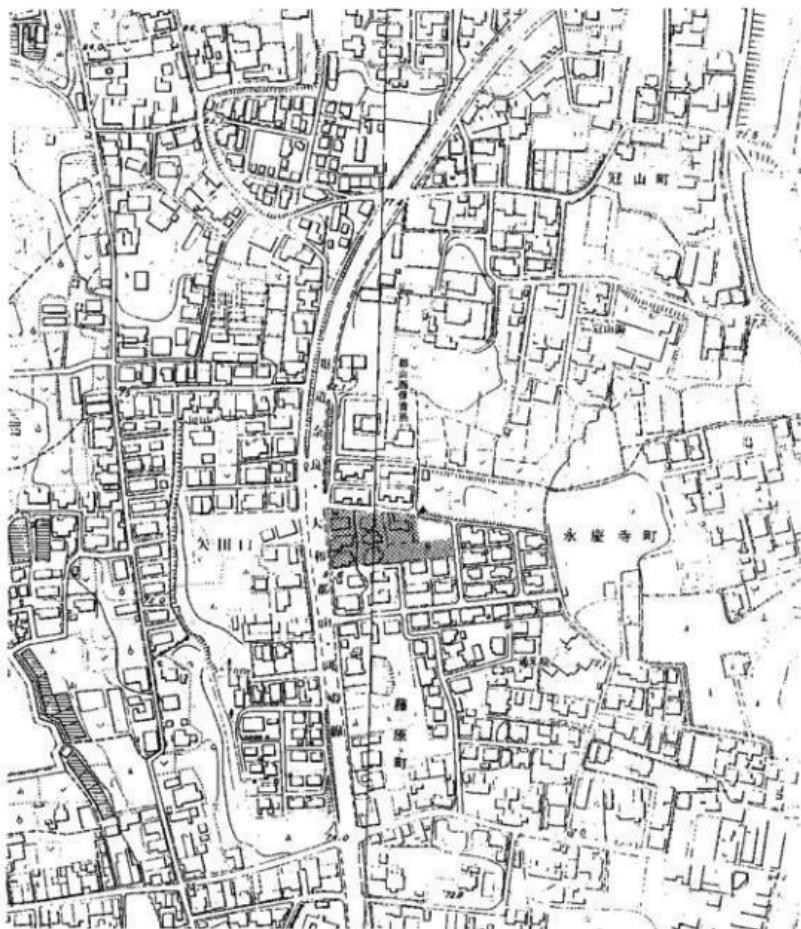


図7 第17次調査地点

をもちらながら造成されていた。この各平坦部に南北トレンチを3本設定して調査を行った。調査対象面積は、 $2,416\text{ m}^2$ 、内  $300\text{ m}^2$  を調査した。

#### 第Ⅰトレンチ

幅4m、長さ30mのトレンチ、造成土を除去すると地山面である。遺構はなく、搅乱の穴、溝のみである。

#### 第Ⅱトレンチ

幅5m、長さ25mのトレンチ、遺構は検出していない。

#### 第Ⅲトレンチ

幅4m、長さ13mのトレンチ、搅乱の溝で地山が大きく掘削されている。

以上、いずれのトレンチでも遺構は検出されなかった。近年の市営住宅の建設に伴って大きく削平されたためであろう。遺物についても近～現代の陶磁器・瓦などであり、目立ったものは出土していない。

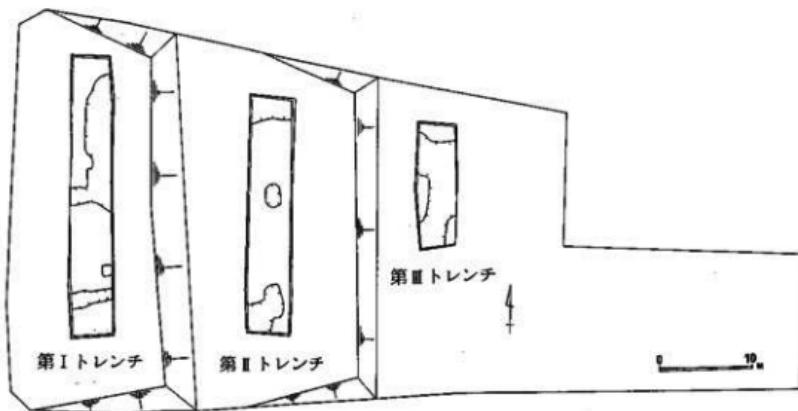
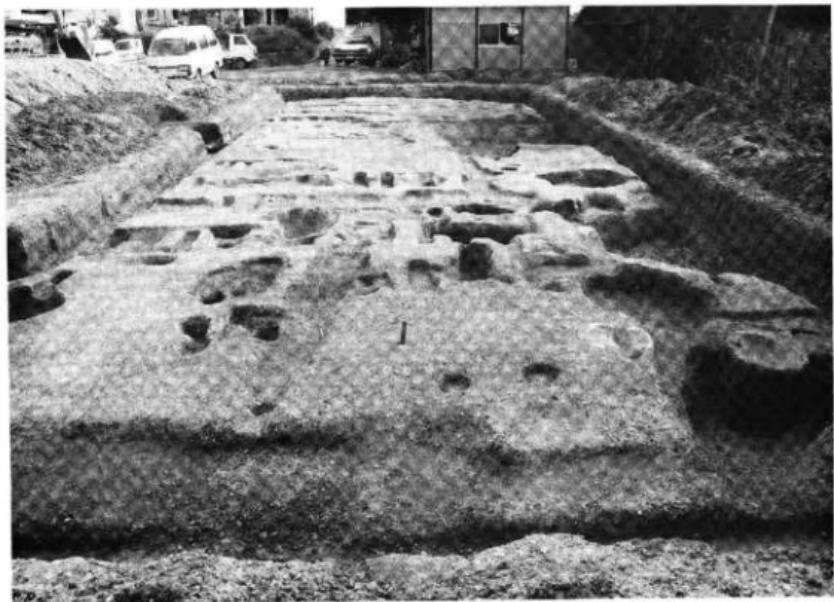


図8 第17次調査トレンチ

## IV ま　と　め

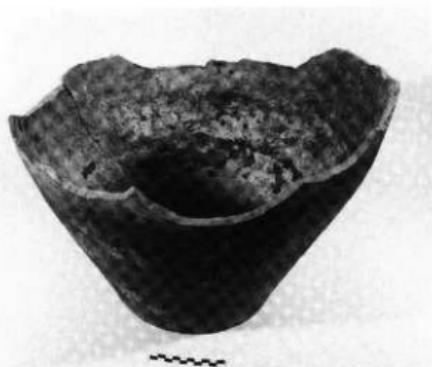
第16・17次調査では大きな成果は得られなかった。近世の遺構が近一現代の削平によって失われた結果である。近世城下町そのものが現在の都市と重複している場合、近世から現代に至る途切れることのない生活の連続は、地下遺構を破壊する。とはいえ、これまで調査した地点や面積はごく限られたものであり、数少ない調査結果から遺構全体の遺存度を云々するのは早急にすぎよう。以後の調査に期待したいと思う。



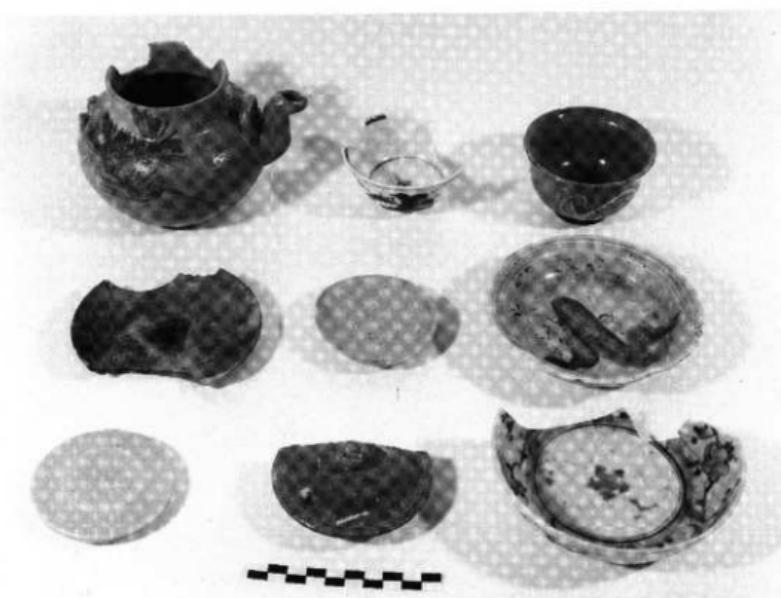
1. 遺構完掘状況（東西トレンチ、西より）



2. 同 上（南北トレンチ、南より）



1. 備前系大甕(埋甕)



2. 日常什器類



1. 第Ⅰトレンチ全景（北から）



2. 第Ⅱトレンチ全景（北から）